

平成 29 年度 第五回第 1 層協議体 会議議事録

日 時：平成 30 年 2 月 27 日（火）14：15～16：15

場 所：パルテノン多摩 第 2・3 会議室

| | |
|-----------------------------|---------|
| 出席者： 公益社団法人多摩市シルバー人材センターの職員 | 伊藤 芙美子 |
| 高齢者福祉に関する NPO 法人団体の構成員 | 伊藤 玲子 |
| | 杉本 依子 |
| | 寺田 美恵子 |
| | 藤咲 憲子 |
| 消費生活協同組合の職員 | 茂木 利信 |
| 生活支援サービス又は介護予防サービス関係企業の職員 | |
| | 渡辺 桂祐 |
| | 園部 裕樹 |
| 保健福祉関係者 | 近藤 一美 |
| 自治会又は管理組合関係者 | 藤井 富男 |
| 独立行政法人都市再生機構の職員 | 追川 典子 |
| 地域包括支援センターの職員 | 梶淵 正 |
| 介護予防による地域づくり推進員 | 桐林 亜希子 |
| 司会： 第 1 層生活支援コーディネーター | 田中 千秋 |
| 出席オブザーバー | |
| 公益財団法人さわやか福祉財団 | 丹 直秀 |
| 第 2 層生活支援コーディネーター | 森田 一光 |
| | 畔上 なつ美 |
| 社会福祉法人多摩社会福祉協議会の職員 | 東島 亮治 |
| 多摩市職員 | 田島 佐知子 |
| | 水谷 正恵 |
| | 山田 洋子 |
| | 野々山 喜代美 |
| | 田中 |

（開会時刻：14 時 15 分）

開会

司会

皆さま、本日もどうぞよろしくお願ひしたい。最初に、本日の配布資料について説明させて頂く。移動分科会からの資料、次第、研修会のチラシ、1セット（チラシ、申し込み&アンケート、さあ言おう、多摩市提供資料）、フォーラムのアンケートについては、後程回収さ

せて頂く。

次第の4、市役所より課題共有の取組という事で、地域ケア推進係より、地域ケア会議の資料が1部。さわやか福祉財団の最新号資料が2部、多摩フレイル予防プロジェクトのご案内1部、社会福祉協議会からの資料が1部、永山地域連絡会でのかわら版資料が1部。

それでは、多摩フレイル予防プロジェクトと災害への備えの資料について、ご担当者がいらしているので一言PRをお願いしたい。

出席オブザーバー

こんにちは。高齢支援課の水谷です。お手元にあるTFPPの講演会と、測定会という事で、3月17日(土)、13時30分より、日医永山病院の集会室を借りて実施。TFPPとは、多摩フレイル予防プロジェクトの略称。検討チームが多摩市のオリジナルのフレイルチェック項目を作成、今後全市展開するために、大々的にイベントを行う予定。これは、単にフレイルの状態を早めに気づくためにチェックするだけでなく、お元気な方々にも担い手側に回って頂くという狙いを持ったプロジェクト。皆さまもお時間があれば、是非ご参加頂きたい。

司会

ありがとうございました。続きまして社会福祉協議会からお願いしたい。

出席オブザーバー

こんにちは、社会福祉協議会の森田です。ボランティアセンターからのお知らせとなる。「災害への備え」講座の開催。3月11日(日)14時から16時 関戸公民館ヴィータホールにて。平成23年の東日本大震災から7年目を迎えて、一部は国士舘大学の永吉先生、熊本ほか災害ボランティアの設置、運営などを行っている方で、第二部は南部さん。ビブを考案された方。ロードを広めている。百草団地、瓜生地区、豊ヶ丘4、6丁目でロードを行う予定。そうした繋がりもあり、講演頂く。

司会

では、次第の3番に移る。コーディネーターからの報告について。

手元資料はないので、スライドにご注目頂きたい。

第1層コーディネーターのおおまかな業務については、前回の協議体で報告をさせて頂いている。12月から2月で訪問B「生活支援サポーター」の養成講座が終了、指定を受けている5つの事業者と市役所を含めて連絡会を開催。地域包括支援センターと顔の見える関係の中で行いたいとの意見もあったので、地域包括支援センターにもご協力頂き、どうしたら多摩市の中で生活支援サポーターが増えていくのか、検討していきたい。

分科会は3月の開催はなし。今年は年間26回の分科会を開催した。参加頂いたみなさまには御礼を言いたい。来年度の取組みについては次第の6番で、分科会での話し合いがあるので、そちらでは率直なご意見をいただき、来年度はどのように進めて行くのかというところを各分科会で詰めて発表いただければと思う。資料の2番、ネットワーク構築については今日の協議体の会議がそれにあたる。多摩マイライフ包括支援協議会で受託後は4

回開催となり、今年度は今日が最後となる。続いてニーズ把握については、地域包括支援センター代表会議、中部地域包括支援センターが中心となって開催している、永山地域連絡会の会議に参加をしている。

資料の4番はコーディネーターと多摩市の定例会開催について。支えあいフォーラムでは、安里さんより一層、二層の紹介を頂き、PRを行なった。

その他、皆さんのお手元にある、地域包括支援センター担当圏域ごとのリーフレットが完成し、市民の皆さんへ、イベント等を通じて配布を開始している。

それとは別に、桐林さんが昨年から進めている、地域包括支援センターへ配布の内部資料として冊子を作成している。リーフレットについては、地域包括支援センターごとに色分けが必要とのお話があった。地域の情報については、1年ごとに更新で社会福祉協議会と検討中。

ホームページについて、現在受託団体である、多摩マイライフ包括支援協議会のホームページはあるが、生活支援体制整備事業のページがなく、現在作成中。分科会ごとの内容もホームページにアクセスいただき、確認できるようにしたい。来年度からは次回開催日程や、各分科会の動きを共有できればと考えている。また、多摩市まるっと協議体や、生活支援体制整備事業についても説明など入れる予定。今年度中の完成を目指している。

多摩マイライフ包括支援協議会で、検索頂くとアクセスできるようになっているので、ご確認いただきたい。ご意見を頂ければ見直しなども行なう予定。

続いて高崎市の視察の報告。全国移動ネットワークの視察に、杉本さんから御誘い頂き同行をさせて頂いた。高崎市では生活支援体制整備事業を、どう進めているのかや、移動の仕組みなどについて、第二層コーディネーターの森田さん、畔上さん、杉本さん、東島課長で、2月5日に視察。視察先は、認定NPO法人じゃんけんぼん、高崎市役所、二層の協議体の八幡地区協議体。午前中移動、午後からの視察だったためあまり時間がなく、意見交換のための十分な時間がなく、主に説明を伺ってきた。高崎市は人口約37万人、平成の大合併にて1市と6町村が合併。そのため地域ごとに特徴がある。高齢化率は26.8%。大きく異なるのが、第1層生活支援コーディネーターが2名配置されている事。第2層のコーディネーターは現在は配置なし。進め方は1層の生活支援コーディネーターと行政と高齢者の安心センター、いわゆる地域包括支援センターのが第2層の協議体を作ろうという事で、高齢者の安心センターのある26地域で第2層の協議体を作るため活動。第1層の協議体はまだ設置されていない。まずは第2層協議体からという事で活動されている。多摩市とはアプローチが異なる。視察に行った第2層の協議体では、ニーズ把握、社会資源の把握などを行っていた。構成メンバーは住民と区長さん、行政、民生委員など。多摩市の第1層協議体の皆さんと検討していることを、第2層協議体で検討しているイメージ。平成27年から第2層協議体立ち上げのため、26地域において働きかけを行ってきた。3年で全ての地域で、第2層協議体の立ち上げを目標としており、今年3

年目で、時期はそれぞれだが、全ての26地域で協議体が立ち上がった。来年度は第1層協議体の設置や第2層コーディネーターの選定などを検討していく予定とのこと。

出席オブザーバー

多摩市社会福祉協議会の畔上です。写真をご覧くださいながらご報告したい。まず認定NPO法人じゃんけんぼん、居場所に伺って、理事長に取り組み状況を確認。高崎あたりになると、NPOの数が多くないので、いろいろな事業を高崎市から委託されて行っている状況。じゃんけんぼんさんも、たくさん事業を行っている。続いて、第2層協議体を見学させて頂いた。第2層協議体は26ある。立ち上げ方も市独特のものがある。地域の団体に声を掛けたわけではなく、地域住民に参加を募って参加頂き、第2層協議体発足への検討を重ねて、つなげていった。参加の皆さんも意識が高く、会話の中も第1層の協議体は、第2層協議体とはという言葉が飛び交うなど、協議体の役割についても、住民の方が理解して進めているという事が見受けられた。協議体の中には地域の自治会長や民生委員さんが参加していない地域もあったようだが、やはり参加されている住民の方から、参加頂いた方が良いという意見から、必要性をお話して参加頂くことにこぎつけているようだ。作成してある模造紙は、各地区の協議体ごとにまとめたもの。全協議体が集まる会議でPR等をしたとの事だった。立ち上げたばかりの協議体もあるようだが、熱心に話し合いに参加されているとのこと。高崎市と地域包括支援センターと第1層の協議体が密接に連携していると伺っている。

司会

杉本さん、お願いします。

出席者

ゆづり葉の杉本です。生活支援体制整備事業、総合事業の中ではサービスの中に移動を地域に作っていかうというのがある。高崎市ではそこまでには至っていないのは分かっているが、認定NPO法人じゃんけんぼんが、福祉有償運送を行っており、今後どのようにしてそうした所に協力、協働していくのかそうしたところもお伺いしたいという事もあり、全国移動ネットが訪問先に選んだ。日本財団事業には健幸まちづくり推進室の伊藤室長もメンバーとなっており、今回の高崎市の状況を伺った時に、是非多摩市の若い方々や、コーディネーターにも同行頂きたいとお話があり、声掛けした。高崎市では、市長が出て行く福祉を訴えられているという事で、市の方の対応では、交通課も出てくる感じがあった。多摩市でも活かしていただきたいと感じた。

司会

視察について何か質問があるか。アプローチ方法は異なるが、地域の実情に合わせた話し合いの場の整備が進んでいると感じた。一方で地域によって進捗状況も異なるのは、課題が多い地域もあるということ。多摩市は第2層協議体がこれからのため、社会福祉協議会さんや、みなさんと話し合いながら進めていければと思う。続いて研修会のご案内。お手元に資料を確認いただきたい。講師にお招きしている、服部氏は元八王子の職員の方で、

総合事業のガイドライン作成に関わった方。総合事業、生活支援体制整備事業について、その背景や、目指す方向性などについてお話頂く予定。皆さんも是非ご参加頂ければと思う。事業所が対象だが法人内でも参加希望の方がいらっしゃればお誘い頂きたい。続いて地域ケア推進係から、課題共有の取組みについて、ご担当の方にお話を頂く。

出席オブザーバー

皆さん、こんにちは。

多摩市高齢支援課の野々山です。今日は田中と一緒に来ました。15分程度で地域ケア会議と、多摩市まるっと協議体との関係性について、お話させて頂ければと思う。

お手元にA3の資料を配布しており、開いて頂くと地域ケア会議のイメージ図が入っているので、こちらをご覧いただきながら説明をお聞き頂ければと思う。資料を広げて頂くと、地域ケア会議ってなに、とある。「地域包括ケアシステム」の実現に向けた一つの手法が地域ケア会議、と書かれています。例えば、私が年をとっても、介護が必要な状態になっても、出来るだけ長く自分の家で暮らしたい等、お一人お一人の地域での生活を支えていく、イメージ図として、植木鉢が地域包括ケアシステムの図として使われている。この植木鉢の図は、だんだん進化していて、新しいところとして、一番下の部分、受け皿

「本人の選択」が図の中で一番重要視されている。対して、本人家族がどのような心構えを持つのかということも重要になってきている。本人もこうして暮らしていきたいという希望を、専門職が自立支援するケアマネジメントをしていくところが最も大切。そのため葉の部分と土の部分がある。土の部分は一人一人が住む地域の部分、生活支援福祉・サービスとされたところが「介護予防、生活支援」となっている。土の部分は地域に今ある物を育み、新たに作り出したり、自助である自分が出来る事、互助の愛情や、やさしさに支えられた住民主体のもの、NPOや色々な方々の創意工夫で地域を作っていくという事で、土の部分は社会への参加への機会の確保、介護予防機能もこの土が担っていく。土によって葉の状況も変わって行くとなっている。全体の地域ケアシステムの構築の一つの手法が地域ケア会議となっている。地域ケア会議は、各市町村によって手法は任せられている。多摩市は平成29年の4月に高齢支援課と地域包括支援センターにてあり方検討委員会を立ち上げ、ハンドブックを改訂。地域ケア会議を行っている状況として、個別会議を3つ開催。1. 地域関係者会議、2. 専門機関会議、3. 自立支援会議がある。1と2は地域包括支援センターが主催している会議。違いは、1は地域関係者を集めた会議で、地域の方々、自治会長やサロンの方々が入っている。本人や家族の同意が必要。この会議にご家族やご本人が入ることもある。2は本人や家族の同意が取れない場合、周りの人、専門機関もシェアをしていくのに、どう対応していくべきかを考え行く会議で、専門職を含めて考える会議。3はぐっとらいふミーティングと命名しており、この自立支援ケアマネジメント会議は、高齢支援課が主催。利用者の自立支援とQOLの向上に向けたケアマネジメントによる職種の話し合い。専門職種がアセスメントのところに助言など、みんなと一緒に考えるという会議。この3つの会議を通して、色々な課題が上がってくるが、その課

題を共有し、Aさんが困っていることは、Bさんが困っていることかもしれない。あるいは、それは多摩市全体の困りごとかもしれないという事で、それらを次の課題会議として、この図で行くと地域づくり（ネットワーク構築・地域課題発見・資源開発）のところになる。地域の課題会議として、自分ごとミーティングとネーミングしているが、ここに上がった課題について話し合う場としている。こちらの会議の目的は、在宅生活をより自立したものなるように、地域のあらゆる資源を充実させること、地域の課題に対する解決策、改善策を検討する事を目的としている。なので、地域包括支援センターの職員だけでなく、認知症の専門連絡会であるネットワークオレンジの会、在宅医療・介護連携の会の方、まるっと協議体の第一層コーディネーターや、第2層のコーディネーターの方にも入ってもらっている会議です。課題を共有して、解決策、改善策を検討して、どの機関がどのような役割を担えるのかを明らかにして会議体へお持ち帰り頂いている。地域にサロンが少ない、居場所の少ない地域がはっきりしたり、バスステーションがない、乗り継ぎが悪い、急勾配の途中で自宅があり、参加出来ないなど、いろいろな課題が上がってきている。色々な所で話し合っていていただき、それによって最終的には制度形成となる場合もあるし、課題が事業化されたり、この会議から地域包括支援センターに戻ってくることもある。地域ケア会議と協議体の関係性。以前厚労省主催の市町村セミナーにて「生活支援体制整備事業や、地域ケア会議による地域のニーズ把握から政策形成への展開」というテーマで会議が行われた。この会議の中で示されたところによる、地域ケア会議と協議体の関係性は2つある。その間をつないでいるのは、生活支援コーディネーターである。ここをコーディネーターが担った方が良いという図だった。多摩市は現在、生活支援コーディネーターがある所に、自分ごとミーティングを置いているという関係図になっている。地域ケア会議があり、そのうえで課題が出たものを自分ごとミーティングで話し合う。もしその話し合いで課題が上がってきて、持ち帰ろうという事であれば、第1層コーディネーターが持ち帰りを頂くことも可能で、第2層コーディネーターが個別の課題会議にも出席頂いているので、色々なニーズが発見出来たり、地域の方々の困りごとや資源が必要だという事の認識出来たり、個別会議から自分ごとミーティングにも参加頂いたりという事になっている。それがこの図である。この会議体には在宅医療連携関係者もご出席いただいているので、在宅医療連携や認知症の方々の情報を共有する事で、そちらの取り組みも見えてくるし、取り組みの中で生かすものがあれば、色々な協議体との連携が可能かと思う。事例を出して話してみたいと思う。先程、Aさん、自宅で暮らしたい希望がある。体調不良で2週間入院となった。入院中に軽度の認知症状が出て、また歩行時のふらつきありで介護認定の申請、要支援1の認定。地域包括支援センターはみなしで、現行相当のプランを入れた。買い物同行のプランを入れた。1時間程度。45分から60分以内の支援内容。買い物に行ける範囲は、自宅付近のコンビニのみとなった。この状況で自立支援ケアマネジメント会議に上がってきた。会議での話し合いでは、Aさんは料理が好きで、食材を自分で購入したい、近隣の方を読んでお食事を提供するのが好き、この型の目標は自分で食

材を選び、料理をしてふるまうという事が目標ということになった。まず、足腰を鍛えることが大切。すぐに出来る事としては、地域の介護予防教室に通う事。他に課題、あったらいいなという事は、買い物のお手伝いで、生ものの荷物を届けてくれると良い。生ものの食材はスーパーでは届けてくれない。また、社会参加としては、お料理をふるまう場所の提供、これが課題として上がってきた。個別会議から上がってきて自分ごとミーディングに上がってきた。Aさんは足腰が丈夫になれば、買い物も自分でいけるようになるだろうが、以前行っていた遠いスーパーでは、自分で選ぶことは出来ても、重いものを持ち帰るまでは出来ないの、生ものを配達出来る配達サービスがあったらいいな、という課題が上がってくる。もう一つ、地域で料理をふるまう場所がないかという課題が上がってくる。こちらの課題が上がったことを、分科会に持ち帰り協議頂く事で、資源の開発、調整など話し合いを頂く。協議体間で良い情報が共有できればご協力頂く。連携して手を組むことの模索など。こうした事を1層、2層とともにコーディネート頂く。地域ケア会議が、色々な方と手を組んで頂いて、植木鉢が一体化していくことで、地域包括ケアシステムが作り上げられていく。この手法の一つが地域ケア会議である。第2層は地位ケア会議も個別会議にも出て頂いて、ニーズや地域の状況が分かったうえで、自分ごとミーディングにも参加頂いているので、お忙しいとは思いますが、自分ごとミーディングを開催しているのは高齢支援課なので、連携を図っていきたい。

司会

分科会には地域包括支援センターの関係者も参加頂いており、移動についてなど、テーマに関する困りごとなどは、直接分科会で課題を上げて頂いている。そのため資料にもあるように円を描くように、課題は協議体にはある程度上がっていると思う。

出席オブザーバー

私が言うのもなんですが、地域ケア会議は包括支援センターが中心となって個別のケースを検討する会議です。まるっと協議体に、どのようにニーズが上がってくるか。地域ケア会議で、個別の案件が上がってくる時に、地域全体の課題となるように、まるっと協議体に全体の課題として、地域包括支援センターからも上がってくるよという事。まるっと協議体でも検討して事業化したりという事です。地域包括支援センターとしては地域ケア会議を行っている。

出席者

第2層協議体と、地域ケア会議の違いは？

関連しているのは分かりますが、第1層協議体との関係が知りたい。

似すぎているので、分らない。第2層協議体に移行させるものか。

出席オブザーバー

地域ケア会議は、個別のケース会議から移行していくもの。その人自身の生活の個別の会議を行う事で、その人自身の生活をしていくために、地域の課題が出たものを解決していく。個別課題から地域課題が出てくる。

出席者

地域課題を検討するのが第2層協議体なのか。

出席オブザーバー

地域課題について話し合うのが自分ごとミーディング。ここで色々な協議体が集まっている。まるっと協議体も含めて、たくさんの協議体で色々な情報を共有する事で、協議体が繋がって、そうなることで、第2層に繋がっていく。課題会議というところには第1層コーディネーター、第2層コーディネーターともに参加してもらっている。目指しているところは同じ。

出席者

その連携はこれからなのか。第2層協議体が発足したら何をしてくのか。とても似ているので。地域ケア会議は第1層や2層でどの様な位置を占めるのか。

出席オブザーバー

補足します。今までは一番最初にできたのは地域ケア会議。個別の課題をその方の事だけで解決するわけではなく、地域の課題として話し合っ解決しようという事で始まった。そこに協議体の理念がさらに加わり、生活支援体制整備を更に進めていきたいと思いますという事になった。地域包括支援センターと、地域の住民だけでは到底解決できない問題が出てくる、そうした時にNPOや事業所が出てきて、更に難しければ企業出てきて解決していく。そうした事が出来る仕組みが必要だという事で、出てくるのが第1層協議体。だから第1層協議体には、NPOや企業が入っている。日々ネットワークを作っておくことで、何が出来て、何が出来ないのか、私達も分かるし、何が私達が解決できなくて困っているのかという事を、企業が分かってくる。企業同士で検討すればもっと良いものが出るかもしれないというところに発展する可能性もある。地域の課題が色々なところで認識することが出来る様になる。それが第1層協議体だと思っている。第2層協議体は、もっと小さいエリアなので、課題を解決するのだが、地域ケア会議は個別の課題で止まる、課題出しまで止まる。地域課題を検討する段階は、第2層の協議体と重なってくると思う。最初は厚労省も別建てで作っていたが、ガイドラインによっては一緒にということもある。話し合うだけではなく、生み出さなくてはいけないというところ。地域包括支援センターは、課題が把握出来るが、作り出すところまでは出来ない状況にある。そのため第2層のコーディネーターがマネジメントして、話に加わり、課題解決の協力者になって頂くという作りだと思っている。

出席者

そうすると、第1層協議体は何をしたらいいのか。全域を見渡してということか。

出席オブザーバー

今の話は色々なところから出る。もう一つの見方として、地域ケア会議は、医者から介護担当、当事者課題の家族から、色々な方々がその方の今後を探る場。そういう方がたくさんいる地域なら、政策的に手を打たなくてはならないし、政策提言もする。第2層の協議体

は、今度の改正で出来た協議体。第1層は政策提言、個別の課題をあげていくというところでは似ているが、第2層については、専門職ではない色々な人が集まって、助け合いで支えられるような仕組みを作ろうというもの。ある意味では、医者やヘルパーなどが関われない、認知症程度のニーズに対して、支え合いでサポートできる体制を作ろうというもの。そういう意味で、地域ケア会議と第二層協議体はかなり異なっており、違いを分かって頂けるものと思う。第2層の協議体はこれから、地域で出来ていくと思うけれども、住民の方にも、NPOの方にも参加頂き、対象は要支援程度の方、専門職、プロの手を煩わせなくても、安心して暮らせるような仕組み作りをしようというもの。かなり地域ケア会議とは狙いが異なる。分科会は移動や居場所等、それぞれが具体的なテーマに取り組んで頂いているところだと思うが、高齢者の方を地域や住民の力で支えるにあたり、その仕組み作りをするのが第2層協議体なり第2層コーディネーターの役割という事になる。

司会

続いて分科会の報告に移りたいと思います。

分科会報告が、終わりましたらテーブルごとのディスカッションをお願いしたい。

出席者

移動の分科会。月1回程度。12月21日、1月18日、2月19日に、それぞれ分科会を行った。移動モデルを考えてみようというのが主な検討内容。第5回目では、主に住民主体での移動支援モデルを検討した。エリアごとの状況を、地域包括支援センター、多摩市、社会福祉協議会等で検討。地域の特性、高齢化率、居場所の確認、車両の保有率など、知恵を出し合ってみた。桜ヶ丘地域、聖ヶ丘3丁目、東部団地と言われる所を含め、連光寺6丁目等。6回目は引き続き移動モデルについて検討し、地域の皆さんで移動サービスを担うという事について、不安材料があることが分かった。過去の色々な状況等で、担い手がないとか、細かい地域情報も上がってくる中で、地域を決めてモデルまで持っていくには、時期早尚なのではないかという意見が出た。どういう移動モデルが良いか、移動の目的、元気塾やサロン等の行き先、運営主体について検討。交通マスタープランの情報なども頂き、その中では交通に関する地域懇談会が、2018年度に検討されているという事で、分科会として移動に特化したワークショップ開催の意見もあったが、重複しないように、こうした事も視野に入れて、今後考えていこうという事になった。その中では運転手等の担い手の研修も、検討していこうという事になった。7回目では、1、少し目的を持ったお出かけ、2、住民のお助け型で、多様に移動サービスを考えていこうという事になった。1と2それぞれで、住民主体で出来るのか、高齢化などで地域の方が担い手はあるのか、という課題出しも行った。今後のスケジュールでは、来年度の上半期で引き続き検討、下半期でモデル実施、検証が出来ればと考えている。第7期の介護保険計画の中で、少し動きを作り検証して考えていきたいと思いますというところ。検討することが多いが、計画づくりも含めて、モデルの試行、車両、保険、管理、コーディネート、市民の皆さんに研修していくというところを検討して、来年度実施のところまで進められればと考えている。

司会

続きまして、生活支援・見守りの報告。今日は中部包括支援センターの淵野さんが欠席のため、代わりに報告をする。先日開催された永山地域連絡会については、後ほど補足を森田さんからお願いしたい。分科会は第5回を1月15日に開催。永山地域連絡会の取組みについて、実践的に地域で生活支援をどのように行っていくかという検討が始まったので、第1層としては、他の地域で同様の動きがあった時に、この永山地域連絡会の動きを伝えていけるような支援が出来たらという意見があった。永山地域連絡会は、永山3、4丁目の住民と、自治会、関係団体などが参加。永山商店街に、見守り相談窓口が出来る際に、ワークショップを通じて地域の課題が出た。見守り、多世代交流、生活支援等について。生活支援の部分については、引き続き検討していきましょうということになり、永山地域連絡会の開催となった。メンバーはレジュメにある通り、（包括支援センター職員、自治会、商店街、NPO、教育、民間企業などの関係者、多摩市、民生委員、社会福祉協議会、第1層、第2層コーディネーター）事務局は中部包括支援センターが担当している。11月30日、2月22日に永山集会所にて開催され、約20名から30名の地域の方と関係者が集まった。主に生活支援について話し合いが行われた。前々回のかかわら版は資料にて配布済み。2月22日については、まだ資料がないが、どんな生活支援があるといいかという事について意見を出し合った。何でも気軽に相談できる窓口があると良い、介護保険に関わらず、なんでも同行して一緒に行ってくれるサービス、夕食も1人分だけ作るのは大変だから、シェアできる仕組みがあると良いなど。前提として、まずは住民同士の顔が見える関係が必要との意見が出た。他に民間企業やNPO団体等が提供しえているサービスと棲み分け。生活支援としては、他に全市的には訪問B養成講座を行っている。講座を受けたサポーターは現在170名程度いるが、地域によっては偏りもある。サポーターさんは遠くまで行けない場合もある。全市に展開していくには、地域の偏りをどのようにするか検討が必要。

出席オブザーバー

永山モデル時代に、生活支援のモデルが必要だという話は出ていたのだが、先日の永山地域連絡会では、グループに分かれて、どんな支援があると良いかを検討いただいた、サービス内容、金額、時間帯などの洗い出しを行い、それについての課題も出てきた。具体的なサービスというよりは、皆さんが交流できる方が良いのではないかな等。

そういう中で、自然と助け合いが出来てくる仕組みのほうが良いのではないかという意見となっている。助けたい人とのマッチングが出来ればと感じた。お助け隊ができるのかどうかということところだが。ネコサポさん、福祉亭さんなど、今ある物をどう活用していくかということところもポイント。そうしたところも継続して考えていければ。

司会

続いて居場所の報告をお願いしたい。

出席者

居場所分科会の報告を行なう。

ざっと、検討内容をまとめたのが、5つです。1. 居場所の冊子づくり検討、2. 通所Cの卒業生のうち、地域との繋がりができなかつた人の要因について。3. 軽度認知症の方でも通える居場所について。4. 閉じこもり傾向、行き先がない人への対応について、5. 移動・生活支援との連携について検討。それぞれについてご説明をする。1の居場所の冊子について、リーフレットは出来上がっているが、それ以外に、居場所に関する冊子が必要であれば、検討していきたい。すでにある冊子や社会福祉協議会が作成しているもの、本日資料で配布されている各地区のリーフレットなどについては、居場所の情報更新に協力していこうと思っている。2の通所Cの元気塾卒業生のうち、地域のつながりが出来たかどうかについて、約7割強が繋がっているという事だった。繋がり先としては、介護予防教室、サロン活動、介護保険事業所など。事業所については繋がり先としていいのかわからないが、中部包括支援センターの場合は、見守り相談窓口のスペースがありますので大変に活用されていると思っている。全体の6%が途中での退会となっている。他地域に繋がらなかったのが1%で、家族の介護等によりという理由。元気塾がトータルどの程度数字をあげているのか、確認しないままだったので、後でご説明頂ければと思う。すると、7割の数字がどんな数字なのか分かってくると思う。元気塾では卒業生が何らかの形で繋がりが継続できるようにサポートしているため、今のところ、卒業後に何の地域との繋がりが出来た方は少数である。3と4について、地域で、認知症や進行性疾患を患っている方も気軽に通える居場所が少ない現状があり、そうかといって、地域で皆さんをお迎えするわけですが、マンツーマンに近い形での対応の為、あまり多くの方の対応は難しい。課題としては第1層の居場所では、地域で解決できない問題に対応できる居場所や仕組みを作る必要があるのではないかとこのところで、分科会の話は終了した。介護保険制度の中にあるデイサービス、一方で社会福祉協議会が作っているサロン、あるいは通所C元気塾、介護予防リーダーが取り組んでいる介護予防教室、さまざまな教室や居場所が市内に点在している。第1層の居場所分科会としてはその中の、専門的な、今あるだけでは十分機能させられない中間的なものに注目していきたいと考えている。それは、基本的に住民主体ではあるが、地域だけでの開発や対応が難しく、専門家のサポートがあり、運営のバックアップ（費用・移動や生活支援の連携）を必要とするもの。結論は出ていないが、継続検討していく事になった。特に懸念として挙げられているのは、当事者はどう思っているのか把握しているかの点。住民との関わりについて、住民は手のかかる方が同じ場にいると、なじめない傾向があり、なじめないと離れていってしまう。手のかかる方と、キャッチボールがうまくいかない部分がある。住民とはどのような関わり方、地域との関わりは、どのような在り方が良いのか、継続検討となった。それから、中間の居場所として、多少今ある居場所よりも少しプラスアルファ、レベルアップした場所が市内に点在しているわけだが、第1層の居場所分科会が目指す中間の居場所は、特定の人が集まる場所にはしたくない、さらに単発、単年度で終わるようなものではなく、継続性のある居場所

にしたいと意見が出ている。先程お話に出ていた費用とか他の分科会との連携があるところ、それがどのような形が良いのか検討を続けていく。モデルとしては、NPO 麻の葉さんが、現在様々な取組みを行なっており、比較的いいところまでいっているという話が出た。加えて地域への波及効果を持たせるにはどうすれば良いかという事も話し合っている。来年度としては、第1層で取り組む居場所について試行できるところまで持っていければということ。試行に向けて、居場所開発の目的をメンバー間で共有する。当事者、多様な関係者の意見のヒアリングを行なう。実施主体、実施期間、内容、経費、サポート体制、ワークショップなどを開きたい。移動・生活支援との連携も継続検討させて頂きたいと思う。

司会

続いてイベントからの報告。本日は田村先生が、欠席のため代理で報告をさせて頂く。

1月28日のイベントでは、当日の運営も含めて、多くの方にご協力を頂き、御礼を申し上げたい。来場者はスタッフ含めて約150名だった。バンドとのコラボレーションがあり華やかな雰囲気だったのは良かったという意見もあった。一方で団体さんの参加者が多かったので、市民が参加できるような仕掛けが必要だったのではという意見も頂いた。今回は土と支え合いをテーマという所で5団体から発表頂いた。土をテーマに、相澤農園さん、恵泉女学園大学さん、多摩グリーンボランティア森木会さん。支え合いをテーマに社会福祉協議会さんよりご紹介頂いた、おてつだい・エブリーさん、たまりばらんどさん。その後に安里政策監より、多摩市のつながる・つなげるプロジェクトについて発表頂いた。パネルディスカッションでは田村先生にファシリテータをお願いし、会場から回収して質問用紙を参考にしながら進めて頂いた。質問内容としては、どのような場所に相談すれば自分も地域に関わっていけるのか、自分の健康状態を考えて出来ることはないかという質問等があった。後半は展示パネル参加団体から、一言ずつ団体紹介を頂いた。交流会を予定していたが、実際にマイクを持ってしっかりと活動などお話し頂き、他の皆さんが話しを聞くかたちとなった。一方で椅子を片付けるのが早すぎて、立ち聞きになってしまったところは、反省点と感じている。展示パネルも16団体に参加頂き、いろんな団体と地域での取り組みが出来れば良いと感じた。残り時間が25分。「分科会ごとの話し合い」に移って頂きたい。「各分科会の感想や関われることについて」とあるが、分科会ごとに簡単に今年度の振り返りと、そのうえで、来年度どのような活動を行なっていくのかという事を主に話し合い頂ければと思う。例えば、イベントなら今年は健幸支え合いフォーラムを行ったが、来年度はもう一度、何を目的にしてどのようなプログラムをするか検討など。2つ目は分科会ごとに取組についてご検討頂きたい。第2層コーディネーターや、市役所の方も各テーブルに入って頂いて話し合いをお願いしたい。終わったら各分科会より発表を頂きたい。

(各分科会で話し合い)

出席オブザーバー

川田の代理で報告します。イベント分科会では、今年「土と地域交流」については一定の成果を収めることが出来たし、情報交換も出来たので評価できると思う。参加者の中で一般の市民の参加が見られなかったのが残念。原因はいろいろあると思うが、例えば、地域、テーマ設定、PR方法について工夫の余地があると思っている。来年もこれを続けるので良いと思うが、広く市民に参加頂けるよう目指していきたい。

出席者

移動から発表。目的地型、または住民お助け型、の2つに方向性は決まってきたので、計画作りに移行した方が良いとなっている。1番の目的地型、地域ケア会議から元気塾についての課題も上がって来ている。それ以外になるべく、ワークショップなどを通じての困りごとを探して、サポートしていく必要がある。

2番目の住民型については、住民や地域に手上げ方式で仕掛けるが、乗ってこない可能性もある。自分たちがやりたい事、必要と思う事でないといけない。住民の人が出来ないところを、どうカバーしてどう気づいてもらうのかを考えていかないと上手くいかない。担い手の講習、研修や補助なども検討予定。さらにどのタイミングで行うかなど、スケジュールを早めに決めていく必要がある。補助金について等、伴走型で支援していく事になるのであれば、そのあたりの仕組み作りも必要だ。高崎市にも行き、交通関係部署にも関わっていただかないと、福祉はそちらで行って下さいでは、移動の問題については解決が難しい。困っているが、担い手はいない状態ということを考えていかないといけない。市民も世の中が変わってきて、依存からの変化も見られる。そのあたりを考えながら、第7期、3年間の間に何かしら少し芽を出したいと考えている。

司会

次に生活支援をお願いしたい。

出席オブザーバー

生活支援の前に。補足がある。間もなく、交通マスタープランが出来上がる。出来上がると、次に地区毎の交通計画を作る必要がある。それにあたり、懇談会を地域毎に行なうことになっていると担当部から聞いている。こちらに私たちが参加のお願いは可能だと伺っているのですが、そうしたところも、来年参加出来たら良いのではないかと考えている。懇談会が長期的なもので1、2年かかると思うので、また情報を共有させて頂ければと思う。交通部局へ協議体として会議への参加依頼も可能なので、分科会に場合によっては参加頂くように依頼をかけていければと思う。

生活支援のグループについて、淵野さんがいないので、代理で田島が入りました。淵野さんがいない中で、結論を出してしまいましたが、今まで2年間生活支援を検討して来たが、検討のみでなかなか行動に移れないというところのもどかしさがあった。

永山地域連絡会を一つの生活支援のモデルの場にしようとも思っていたが、第1層が入りづらいという意見があったのも事実。入るというよりは、情報を頂き、他に広めていけるようなら、広めていけたらという意見。生活支援の話をしていると居場所の話とも重なっ

てくる。だから、居場所とも一緒に話し合いを開催したいという意見も出ている。来年度は居場所と一緒に話をしながらという事になった。

出席者

居場所から報告。振り返りと言っても発表で済ませているので付け加える程度で。生活支援と一緒にということについては、異論なしで、よろしく願いたい。それから、生活支援も含めてのところで、居場所分科会では、軽度認知症、進行性疾患の方の居場所が検討としてあがっている。単独地域ではなかなか出来ないので、来年度も検討。居場所の分科会では、居場所を持っている団体からの参加となっているので、課題はあるが、一緒に考えていきたい。月1でも上手くいかないようであれば、もう少し多く機会を持つ必要があるとも感じている。自分の認知症カフェでの至らなさを感じる部分もあるので、話し合いは大切と認識したところ。認知症の方が突然来られてもなかなか周辺が受け入れがたい。居場所もサロンも一緒。そうなる前に、軽度認知のうちから、居場所を知って頂き、利用いただく事が大切なので、生活支援の立場からもアドバイス頂けたらと思う。

司会

全体会が5月開催なので、4月末あたりで次回の分科会開催日を検討頂ければと思う。

居場所と生活支援・見守り分科会の開催は4月23日で開催。移動分科会は4月13日に開催。イベントは、後日調整。

以上で、閉会する。

(閉会時刻：16時20分)